

続・奇跡はある

徳永 耕一

(10)

題字・林田八郎

青春の夢(1)

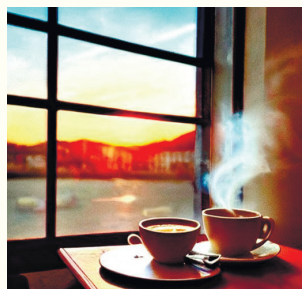
七十歳をとうに過ぎた今でも「貧乏暇なし」で、日々、仕事に追われている。
そんな現実から逃避したいとき、私はたまに喫茶店に逃げ込む。独りコーヒーを啜るうちに、次第に雑念が払われて、考えがまとまったり、ときには忘却の彼方から過去の記憶が蘇ってくることもある。

ある秋の日のことだった。立ちのぼるコーヒーのアromaとともに、大学時代の恋人橋明代(仮名)が、幻のように浮かび上がってきた。いや、その人は恋人と呼ぶにはあまりにも中身の薄い、片思いの人。

私は目を閉じて、甘くほろ苦い思い出に、しばし身を委ねた。今からもう五〇年以上前、大学三年の春のことだった。女子大の寮と私たちの寮のコンパが企画された。私も、隣部屋の親友山下保則と参加した。そこで知り合ったのが、橋明代だ。会場の喫茶店のテーブルに皆が着席したとき、私は相手方の顔ぶれをさっと眺め回した。

私の目が一瞬釘づけになった。その人は、明らかに他の人と雰囲気が違う。

自己紹介のときも、その人、すなわち橋明代は際立って笑顔が素敵で、話し方もソフトで、私は強く惹かれた。歓談の中で数回言葉を交わすうちに、ますますその思いは強まって



喫茶店でのひと時 (AI作成)

Jisco Group

ジスコ不動産株式会社
ジスコホテル株式会社
ジスコ子ども支援株式会社

長崎県諫早市永昌町4-26

TEL | 0957-27-1112 | FAX | 0957-26-1777

いった。

コンパが終わって寮に戻ってきた時、さっそく山下が部屋にやって来て、開口一番、「徳永、橋さんすごかったな！俺、一瞬で参ったよ！」

山下も私同様、橋明代を見染めていたのだ。そして、それが青春の夢の始まりだった。

それからというもの、部屋で雑談したり飲みに行った時、二人は決まって橋のことを話題にした。
「やがて山下は思い余って、「橋明代を個人的に誘ってみる」と言い出し、私に同行を求めてきた。」

直接だと断られると思った山下は、橋の友人の川野エミ(仮名)に先ず電話をかけた。意外にも橋明代たちは応じてくれて、2対2のデートが実現した。私の心は密かに弾んだ。

短時間の喫茶店でのデートだったが、橋明代はずっと笑顔を絶やさず、会話も楽しく、時間はあっという間に過ぎて行った。それから数回の合同デートを経て、私たちの橋明代への思いはますます強くなって行った。

そして夏休みに入ったある日、山下が唐突に私に切り出した。

「おい、徳永。橋さんに会いに行かんか！」
橋明代は夏休みに宮崎に帰郷していたのだ。

山下は自分の故郷が熊本ということもあって、そして何よりも会いたさが募って、そのような突拍子もないことを思いついたのだろう。

私は、考えるふりをしたが、内心すぐに同意して、二人の宮崎への珍道中は始まった。

〈次回10月25日掲載予定〉